

哲學研究

第五十九號

第六卷
第二冊

喜劇と妄想（承前）

今村新吉

四

之から喜劇と妄想との區別を致しましやう普通表面上の觀察では判斷處決に當て缺點ある上からは双方共同の様ですが一步進んで考へますと大分双方間に相違がある云はねばなりません。

喜劇でありますと人物が輕卒であるとか、一定の感情が特別に發達してるとか、笑の材料となるのですが愈々之が吾々に可笑味を與へるには正規的精神の存在といふ事が必要條件であると思ひます然るに此に論じやうとする妄想では外見的缺陷があるといふ計りでなく假令一定の感情が病的に充進してゐるにせよ其人格が弗

透徹性であるといふ事が特徴であります。茲でテオドール、リッブスの語を適用しまして喜劇に審美的價値を與へるには感情移入アイムパチユルの存在が必須だと申し度いですがベルグソンの「笑の研究」中に同氏が興味を覺えたものゝ一として未だ喜劇といふ程には發達して居らない「ポンチ藝に就て記載して居ります夫れは舞臺の兩方から各一人のポンチが出ましてデングリ返りを打て球の様に轉がりながら互に相接近して行くのですが實際デングリ返りの拍子を段々速めるのであります。

同氏の説では此藝が人を笑はすのは醜といふ爲ではなくして硬いと云ふ事である硬いといふのは器械的のもので人間進歩の行止まりの意味であるといふのです私の思ひますには今申したポンチの藝當が可笑しいのは之を演ずるものが器械化したと思はせる處にあるのでして球の轉げたのが面白いのでなく人間でありながら球に化け得る事が人を笑はしながら興味を與へるのであらふと考へます而して其人間の球であるといふ事を見せる必要から其回轉速度を段々加へて行くのでしやう。

又我邦の能狂言が吾々に興味を覺えさせるのは矢張感情移入を巧に利用してゐるからであつて此狂言なるものを分析致しますれば其狙所は色々ありまじやうが、此

所に引用すべきもの、脚色を先づ二種に大別する事が出来るかと思ひます其一はシテアトがお互に自他の缺點をよく知て居て又互に相手にも自分の缺點が分てるもの、だといふ事をも知て居るが双方が相手の缺點に附込まうとする計りで初は双方共相手の目的には心付かずに居るのであるが遂に其素振から相手の意志を察するに到りますが不知不識の裡に自分にある缺點は相手にはないものであるといふ事の注意がなくなる爲各自分の所作は相手より觀破されまして最後にシテの計畫が咀嚼して來る様の仕組であります此種のものでは登場人物間の感情移入は時々出沒し見物は初より之あるが爲双方共充分に有してゐるべき筈の感情移入が時々出沒するのを見て可笑味を感じるのであります例へば「不聞座頭」の如きものです他の一種はシテアトの兩人間には感情移入といふ事はほとんどなくして己れの事は人が知らない、と勝手の獨極から色々の仕業を爲し居るが遂には其爲に尻尾を出すに至て初めて自分に其缺點あつた事に氣付くので此種では見物のみシテアトに對する感情移入のある事は勿論ではあるが、登場人物間には之なき爲可笑しさを感せしめてゐるが最後の落になりて初めて當事者が之なかつた事に氣付くに到て益々見物の興味を完成さす様に仕組まれてあります「寢聲」の如きは其一例だと思ひます、即ち何

124
 れの種に於ても感情移入なる事の利用されてないものはありません。

ベルグソンの笑の研究中で前に掲げましたモリエールの吝嗇爺中のアルバゴンを評して同人が若し吝嗇の爲人から笑はれるのを知たなら改心するとは云はんが之を顯示する形式を變更したであらうといふてるのを見ましてもアルバゴンなる人物は其性癖に驅られて、夢中になつてた爲元來ある筈の感情移入が其時丈一寸歴さへ付けられて居たといふのであつて今述べました狂言に就ての分析と同意義であらうと思ひます異常に甚ざり性癖を喜劇の材料に致しますにしても夫れはウエルニッケーの所謂超價觀念の範圍に屬したものでなければならぬと思ひます。

シユルツは所謂特異妄想なるものは「人間に出來得べき」の標準を缺如してゐる爲に來てるのだとしてゐるが夫れが爲に此ういふ種類の妄想には啻に弗訂正性がある計りでなく尙弗透徹性の存するもので人は人已れは己れと取極めて居る即ちリップスの唱道してゐる實用的感情移入の缺けてゐる爲に來るのであつて此缺陷のある事が特徴であります此特徴を持てる妄想とウエルニッケーの所謂超價觀念との區別は後章で病例に就て詳論しやうと思ひます。

今此「人間に出來得べき」とか「實用的感情移入」とかいふ事を生物學的見地から觀察

して見やうと思ひます近時ウルツブルグ學派の研究に因て明にされた如く判斷と意志行爲とは根本を同じうしてゐるものだと思はれるに至たのですから判斷の病的變化も行動の病的變化も同一見地より觀察すべきものだらうと思ひますそれで睿智界に現はるゝ弗透徹性を有してゐる妄想に類似の事が精神病者の舉動にも現はれて居るかどうかといふ事を調べて見ますと私は矢張あると思ひますそれは何であるかといふと其著明なるものゝ一例は道化即ちファクセンビイルドウングでありますて之は人が批評しやうが爲まいが見て居様が居まいがそんなことには頓着せず獨りで頻に譯なしに巫山戯廻るのです此の如きものを觀察しますと他人は眼中になり即ち弗透徹性のあるといふ事が明白に見ゆるのであります此の如き現象はプロイレルのアウチスミスと名けました自家籠城とも譯すべき精神現象の一部ではありませんが同一視する事は出来ません何故ならば同氏は實在に無頓着なる精神現象の出産物を皆此名稱で一括して居りますが此處では只人間双互間の諒解が缺けてゐる爲に來るものゝみを云ふのであります。

でありますから智情意と區別して其各界に於ける異狀を獨立的に取扱ふよりも何れの界の變化にしる之に通有なる特徴を見出した時には之を捕捉して之に適當

なる説明を與ふべきものであらうと考へます。

私は此弗透徹性を具有する妄想の發生原因は一定の生物學的本能の薄弱乃至缺損であると申したいのです。感情論理に於きましては處決の際種々の感情に一定の價値を附しますが其價値は其箇人の有する本能に因るものでありましてアイヌレ^ルも叡智は價値の創造者ならずして已に存在せる價値を知らしむるのみ而して其價値なるものは根源に於ては生物學的なり」と申して居ります。

而して從來精神病者の異狀行動を感情障礙に基くものとして論じては居ります。が夫れには感情をば只劣等及高等の二種に大別しまして審美道德等に關する高等感情の消失する際でも、食欲、色慾等の如き肉體的快不快に關する劣等感情の減退は必しも之に伴はないのみか時には反て亢進する事があるのは周知の事ですが一定本能の衰弱から普通と異りたる感情分配を來す爲に行動に變化を及す事に論及してゐるものとしては只生殖異常に關してのものに散見する外には餘りない様です。から今私は此篇に於きまして本能に屬する感情の獨立的脱失からも特有の障礙を起し得る事を説かうと思ふのですが解り易い爲に先づ實例を掲げましやう。

患者ハ三十八歳ノ婦人ニシテ十八歳ト十一歳トノ二男子ヲ有シ夫婦間睦マジク

シテ自ラハ某會社ノ女工トナリ家計ノ一部ヲ扶ケシガ大正七年春寒胃ニ罹リ退職セシモ夫及長男ハ某電氣會社ニ在勤シ相當ノ收入アリタレバ其生活ニ不自由ヲ感ゼズ而シテ患者ハ性陰鬱ナリシガ此頃ヨリ殊ニ諸般ノ動作ニ懶ク根氣ヲ失ヒ決斷難ク假令一旦決斷スルト雖モ又忽チ動搖ヲ來シ追想困難ヲ覺へ善忘ノ感アリ且ツ無益ノコト自然ニ念頭ニ浮ビ出デ、常ニ之ヲ思ヒ語メ、日々ノ家事ノ處理モ容易ナラズ、人ト對面スルヲ厭フノミナラズ單ニ人ヨリ見ラル、コトスラ好マズシテ夏期ニ於テモ尙戸障子閉ツ常住座臥己レノ無能ヲ悔ミ、晝間ハ倦怠ノ感アリテ眠ヲ催スモ夜間ハ反テ睡成リ難シ、此間ニ處シテ尙苦痛ヲ忍ビ日常ノ炊事、洗濯等ニハ從事シ居タリ。

卽チ此患者ハ其當時ヨリ運動及思考ノ抑止ヲ發シ決斷困難ヲ覺へ悲哀感情ハ著明ナラザルモ沈鬱トナリテ憂鬱症ニ惱メルモノナルガ一日其次男ヲ絞殺スルニ至リタリ抑モ此兒ハ甚不柔順ニシテ長上ノ言ヲ用キズ他兒ヲ虐グ曾テ爲ニ賠償セシコトアリ此ノ如キヲ以テ患者ハ此兒ヲ惡ムノ念出ヅルコトアルモ又直ニシテ去リ愛憎常ニ一ナラズ現ニ兇行五六日前ニ夫ニ向ヒ寧ロ此兒ヲ殺シテ自ラモ死セント云ヒ叱責ヲ被リシコトモアリキ。

七月六日該兒ハ夕食前ニ外出シ時ヲ經ルモ歸宅セザルヲ以テ父ハ之ヲ憤リ其歸リタル時モ屋内ニ入ルヲ拒ミタレバ患者ハ兒ニ代テ謝罪シ戸ヲ開キテ入レントセシニ該兒ハ雨中ナルニ係ラズ反テ奔逸セシヲ見頓ミニ憎惡ノ念出シモ暫時後ニ其兒ノ歸リシ時ハ此念ハ既ニ去リ快ク之ニ夕食ヲ與ヘ且同夜ハ此兒ニ就テ苦慮スル事ナク安眠セリ翌朝眼覺メシ時ハ尙何等異心ナカリシガ夫及長男ガ例ノ如ク出勤セシ後モ該兒ハ臥床ニ在リ之ガ爲ニ其朝食ヲ準備セシニ不圖其顔ヲ見ルヤ此ク腕白ニシテ復或ハ他家ニ累ヲ及スアランヲ慮リ此憂ヲ續ケンヨリハ寧ロ之ヲ我手ニ刺シ後自ラモ之ニ殉ズルノ勝レルニ如カズト思考シ家族ノ不在ナルト兒ノ睡レルトヲ好機ト爲シ午前八時頃兵兒帶ヲ兒ノ頸ニ纏ヒ絶命セシメ後其屍ヲ己レノ傍ニ置キ此變ヲ電話ニテ夫ニ急報セントセシモ叱責ヲ被ルコトノ一刻ニテモ遅カラシク欲シテ之ヲ止メタリ此クテ死兒ニ對スル愛惜ノ念ハ毫モ起ラズシテ後事ノ處理ニ着手シ室内ヲ整理シ家具被服ノ一部ハ之ヲ賣却シ後快ク晝食ヲ喫シタルガ己レハ警察署ニ赴クベキ身ナルヲ以テ夫ノ相談相手トナサンガ爲故郷ニ在ル親戚ヲ迎ヘントテ自ラ電招シ又其客人ノ爲ニ肴ヲ購ヒ歸リ日没頃佛壇ニ燈明ヲ點ジテ訣別ノ意ヲ表セル折柄長男歸宅セリ暫時ノ後患者ハ

其兒ヲ絞殺セシヲ語グシニ長男ハ驚キ悲ミタリ此ニ於テ無殘ノ行爲ナリシヲ悟
 リシガ尙未ダ悲痛ノ念出デズ長男ハ臥床ヲ展ベテ患者ヲ入ラシメタリ後夫歸リ
 來リタレバ患者ハ之ニ警察署ニ自首スベシト云ヒシガ止メラレタリ然レドモ事
 變ハ人ノ知ル處トナリ其後近隣ノモノ及警官來リタリ其時患者ハ今夜モ尙我家
 ニテ明シ度シトノ未練出シガ已ニ警察署ニ引致セラレテ後初メテ死兒ヲ憫ムノ
 情出デ兇行當時ニ於テ思ヲ翻ス能ハザリシヲ悔ミ入監後日ヲ經ルニ從テ益愛憐
 ノ情加ハリ同月十五日頃ニハ胸中此念ノミニテ滿タサル、ニ至レリ。

即ち此例に於きましては兇行の當日も心靜かに後の事をば整然と攝理しまして
 尙夫の相談相手にとて國元から親戚の者を呼び迎へ其食事の用意を致しました處
 など尠しも取亂した事なく又夫より叱られるのを惧れる心もあり愈々警察署に引
 致せらるゝには殘る夫や子に名殘を惜しむなど家族や他人に對する心持や仕向方
 に就ては殆んど普通の人と同様でありますのに只我手に懸けた死兒に對しての愛
 情丈は遂に其日中少しも起らなないのであります元來此患者の如き憂鬱症では精
 神活動範圍の狹少を來すものであります但本例では限局的に曰はゞ親子間の本能
 といふべきものに基ける精神作用に障礙があつたものだと見られるのです。

此を見ましても本能の病的異狀から異様行動の現はれる事があると云へると思ひます。扱本能を自家保存と種保存との二種に大別するは明の事であつて而して前者には尙直接と間接の二種ありまして其間接のものゝ中に群集を形成してゐる動物では群集的本能が現はれます。群集的本能にも色々の見方が御座りましやうが私は只平たく其著明なる例をば彼の雁の生活に取らうと思ひます。本邦では秋になりますと北から來ますのは元來は直接の自を保存即ちよりよき季候を選ぶが爲めでありましやうが一定の列則ち雁行をなして渡るのは群集的本能に基くるものと云はねばなりません。即ち其一群を爲すものが互に連れたり連れられたりするので列を形成するのであります。尙此の如く目立た群集生活を爲さない動物であつても尙又人類であつても其間に一定の秩序を保有してゐるものは矢張此群集本能からであります。ましやう夫れのみならず人間社會にある善惡の標準の如きも之に因るものであります。ましやう既にニイッジェーも其道德の血統なる著書中に「利己、非利己といふ反對が漸次に人間の良心より萌え出した……此反對の事に喙を容るゝものは私の一家言に従へば群集本能である」といふて居ります。

此言からも分ります通り道德の標準に就ては個人を超越してゐる要素が必要です。

が吾々共が相互關係の行動に對しての適當なる判斷には矢張同種の要素が無くてはなりません而して此個人相互間の關係を保有せしむるものは取りも直さず其源を群集本能に發してるのでありますから從て若し群集本能に陥缺がありますと叡智界に於きましては人間相互間の行動の判斷上に誤の出づべきは當然であります又多くの人間には自己保有の必要上恐怖を起させるものは其本人に對しての意義重大でありますから病的にも追跡妄想を見る場合が實際に多いのです而して此の如き考を訂正するに必要な要素が缺けて居る爲に弗訂正性のあるのも自然の事で又其缺けてるものが個人間に於て自他を同一視する要素ですから此の如き人格者の懷抱してゐる妄想の弗透徹性を特徴とすべき筈であります。(未完)